

## 美しい音色で心豊か 楽団がミニデイで演奏会

石越町芦倉のミニデイサービス(心友会主催、高橋幸子代表)は8月10日、芦倉集会所で開かれ、登米ジュニア吹奏楽団(只野正昭団長)の団員17人が演奏を披露しました。

ミニデイには、地域住民や関係者ら約30人が参加。楽団は「ディズニー・マジカル・マーチ」や「オーバー・ザ・レインボー」などを演奏し、会場からたくさんの拍手が送られました。高橋代表は「楽団の皆さんの演奏を聴き、たくさん元気をもらうことができました。これからはどこかでコンサートがあるときは駆け付け、応援していきたいですね」と心を弾ませていました。



歌手・坂本九さんの代表曲「見上げてごらん夜の星を」が演奏されると、参加者も曲に合わせて一緒に歌を口ずさんでいました。

## 国際交流に心通わせ 老健でネパール文化披露

ネパールのサチコール村、マガール族の青年6人が7月24日、介護老人保健施設なかだを訪問し、歌や踊りを披露して施設利用者と交流を深めました。

交流は、母親が同施設のショートステイを利用して居る桜井ひろ子さん(72)＝追町鉄砲丁＝が提案。桜井さんは、1998年からサチコール村で支援活動を続けており、寄付金を募って青年たちを日本に招待しました。利用者の浅野あや子さん(85)＝中田町城内＝は「とてもすてきな歌声と踊りだったので、アンコールをしました。言葉が通じなくても、気持ちが通じ合えた気がします」と頬を緩めていました。



ネパールで広く愛唱されている曲「レッスン・フィリリ」や、日本民謡「蕎麦節」の演奏を披露したマガール族の青年たち。

## 恒久平和を誓い献花 祝祭劇場で戦没者追悼式

「登米市戦没者追悼式」は8月23日、登米祝祭劇場で開かれ、遺族や関係者など約400人が参列し、戦没者3529人の冥福を祈りました。

式典では、参列者が黙とうした後、式辞で熊谷盛廣市長は「遺族の悲しみと苦労は、筆舌に尽くし難く、敬意を表します。戦争の悲惨さと平和の尊さを次世代に引き継いでいくことが私たちの使命」と強調。参列した佐々木あつこさん(97)＝登米町東針田＝は「夫を戦争で亡くし、毎日仏壇を拜んで顔を思い浮かべています。戦争は二度と起きてほしくない。平和な世の中がきますように」と白菊を献花し、手を合わせました。



献花台に白菊を供え、手を合わせる参列者ら。再び戦争の悲劇が繰り返されないことを切に願い、恒久平和を誓いました。

## 日頃の訓練成果競う 消防団の知識と技術披露

登米市消防団演習は7月28日、長沼フットピア公園で開かれ、市内各町域の9支団、約700人が日頃の訓練で身に付けた消防技術の成果を競いました。

演習は、消防団の知識と技術の向上を目的に毎年開催しているもので、小隊訓練と小型ポンプ操法の2種目を実施。小隊訓練は、指揮者の指示で30人が隊列を組んで行進し団結力や統制を、小型ポンプ操法は、4人で小型動力ポンプを使用して、火点に見立てた的を倒すまでの早さ、安全性、確実さを競います。審査の結果、小隊訓練は米山支団、小型ポンプ操法は南方支団が1位となり、南方支団が総合優勝に輝きました。



どんな現場に出場しても動じないよう、訓練を重ねてきた団員たち。正確で規律のとれた動作は日頃の努力のたまものです。

## 近代的ごみ処理施設 新クリーンセンター点火

豊里町笑沢地内に建設している(仮称)新クリーンセンターの火入れ式は8月23日、同センターで開かれ、関係者らが出席しました。

新クリーンセンターは、ごみの焼却だけでなく、焼却エネルギーを活用した発電施設も併設。施設で使用する電気料金の約7割が賄えます。計量器も現在の1台から2台に増やすことで、混雑の解消が見込めます。熊谷盛廣市長は「発電施設などを導入した近代的な施設になりました。安全・安心を基本に、安定したごみ処理を継続していきたい」と話しました。今後は、焼却炉の試運転を重ね、今年12月から供用を開始します。



熊谷市長と施工者のJFEエンジニアリング西野雅明氏が点火のスイッチを押すと、焼却炉の様子がモニターに映されました。

## 魅力発信プロに学ぶ プロモーションゼミ始動

「シティプロモーションゼミ」は8月3日、市役所迫庁舎で開かれ、市シティプロモーションサポーター13人が参加しました。

ゼミはサポーターのスキルアップのため、魅力発信のプロであるタウン誌編集者やカメラマンなどを講師に迎え実施。魅力発信のポイントを学び、実際に取材や撮影をしながら、市のPR誌を制作します。参加した三浦智恵さん(39)＝栗原市＝は「嫁ぎ先は栗原市ですが、出身も職場も登米市です。話し合うことで、知らなかった市の魅力に気付くことができました。PR誌の完成が楽しみです」と笑顔で話していました。



参加者は、市の特徴や魅力を付箋紙に書き出し整理。市の魅力発信につながるPR誌にするため、意見を出し合いました。